



繪本在原草紙

卷之一

13  
2549  
5-1





門入通  
2549  
1-5

在原子序

大正九年三月三日  
磯貝静昇氏贈

活花のふるふるの編る小  
説をさるる中又武江年  
紀の事小活記削きよめる  
中に拙き僕が筆をかか  
るる國字場なる二個の文を



連著せ給ふ所一頁もあらず  
不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>授合<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>却<sub>レ</sub>て文を  
早<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>罪を<sub>レ</sub>聞人怒<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>看

文化壬申孟春

武江

感和亭

鬼武誌



惣目次

第一回

相撲節會<sub>二</sub>催皇位<sub>一</sub> 名虎憤<sub>二</sub>勝負<sub>一</sub>而謀反  
業平雅戲<sub>二</sub>井筒姫<sub>一</sub> 名虎奪<sub>二</sub>業平<sub>一</sub>投<sub>二</sub>賊室

第二回

静子抱<sub>レ</sub>雅趣<sub>二</sub>小野里<sub>一</sub> 陸奥忍<sub>レ</sub>摺<sub>二</sub>兩婦<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奪<sub>二</sub>賊  
業平救<sub>二</sub>忍摺<sub>一</sub>危難 陸奥為<sub>レ</sub>捉<sub>二</sub>行<sub>一</sub>反<sub>二</sub>間



第三回

業平拜鈴鹿明神 忍摺道鬼屈逢靈

業平忍通二條后 雷鳴鬼一口之段

第四回

業平夜趣高安里 井筒姬詠歌顯操

蒙勅在五下吾妻 千方伏兵襲中將

第五回

杜若折句伏兩賊 忍摺勇敢救危難

千方隅田川卧兵 忍摺潜水復讐言

目次畢

通計十回





在原業平

隱映雪色  
望名山忽  
送寒風字



宿何仰見  
高峰三國  
一尾満  
深言晴雨

在五中將業平ハ平城  
天皇の白子彈正尹阿保  
親王の五男ハ文武の道  
小賢く殊小歌道小通達  
一復其頃世稀美男子  
美男子と聞えり



石川道徳



紀名虎きのなとら

伴能雄ともゆき



伴能雄



野  
力  
十  
廿  
廿

あ  
ら  
は  
ら  
は  
ら  
は  
ら

仁  
王  
門

風

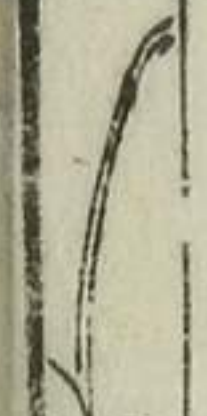
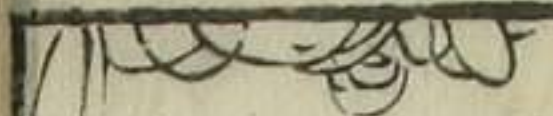
山亭雪後避喧迢寒木  
蕭然落葉多連嶽夕陽  
回望雲霧行棲為言何

右  
寒  
山  
晚  
望

在  
原  
道  
城  
幕



蕭





不恥不仁不畏不義  
其智而險賊而神也



藤原千方

在原草紙卷序

惟高親王



静子

おも本とわが大君の  
いげく鬼のや  
まじん

在原草紙終



揚帆賈舶連滄海傍  
岸漁舟掉碧流白鷗  
浮况王孫渡翠柳依  
依梅兒丘

姑射神人裁玉姿花斜如雪  
先春枝佳賓歡飲陶然醉往  
見芳香無盡時

右 奇梅花賞婦人



足立蘭平



生駒姫



井筒姫



少長互立蘭平  
終色うく在原  
氏乃福祿何と  
ちるきれみら成  
ち歌家の子

茶二婦

心  
中

羨  
水

白  
心





二條后高子姫



野の草を

日尔掃き  
行

の菜は

字米うきや

雨と風を乃

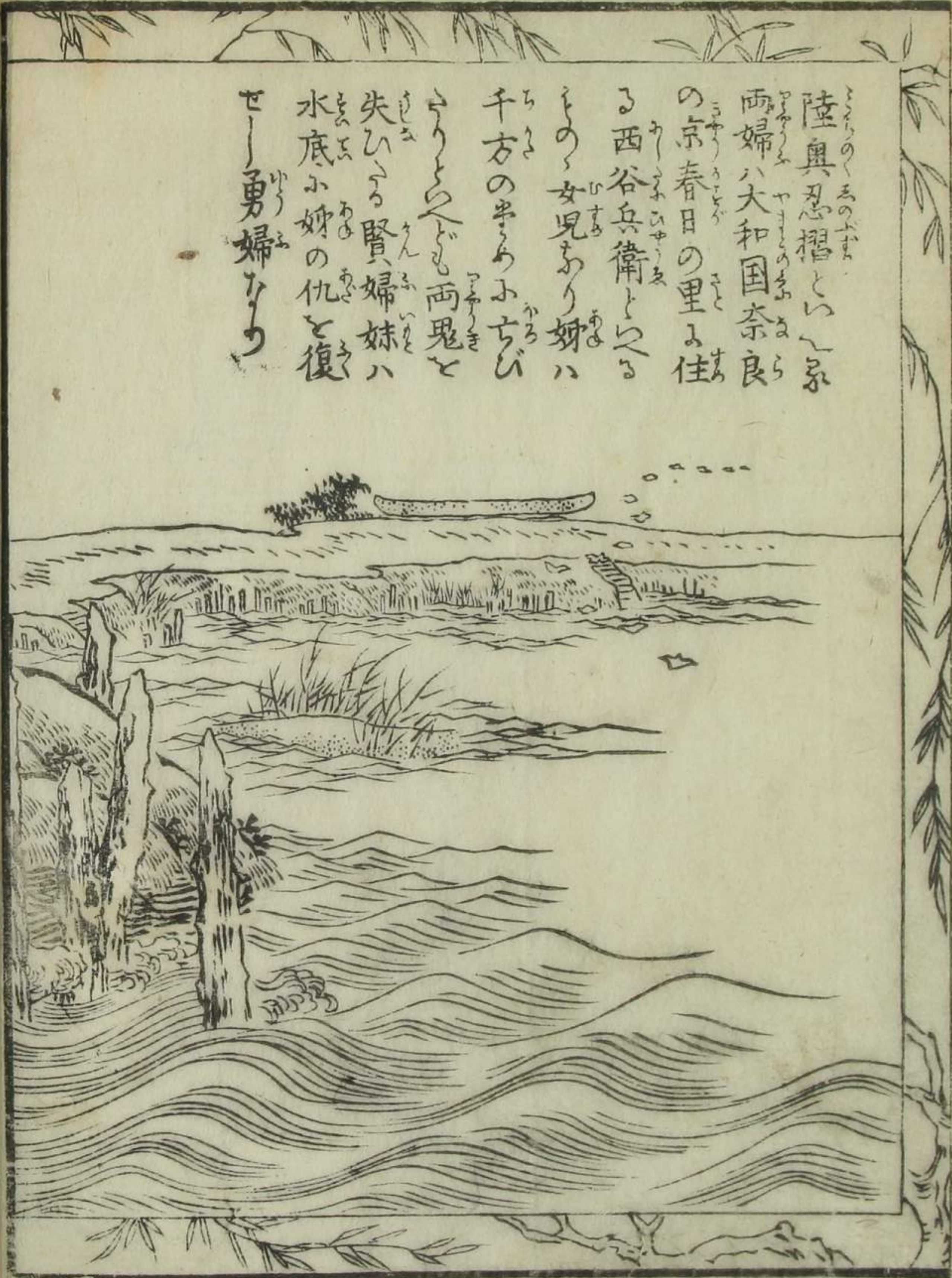
浮  
沈

在源草紙序

在源草紙序



陸奥忍摺といへば  
西婦大和国奈良  
の京春日の里に住  
る西谷兵衛といふ  
もの女児あり姉ハ  
千方の半より小ぢ  
ぢりといふも西鬼と  
失ひたる賢婦妹ハ  
水底小姉の仇を復  
せし勇婦なり



忍摺

陸奥の靈





渡と浮ぶ報い柁さ留る河が  
波は能め有う稱ね利き乎を  
追つ通づ良ら衰と喇ら

復讐ふくしゅう 信夫しんぶ摺ずり在原草紙卷一



浪華 中川昌房 著述  
東都 感和亭鬼武校合  
相撲すもう節會せうかい定皇位じやうじやうゐ  
名席なせき憤ふん勝負しやうぶ謀まう反はん

人皇にんじやう五十五代ごじゅうごだい文德ぶんとく天皇てんじやうと申まを奉ほうふハ御ご政せい明めいハ  
万まん民みんを惠めぐませ玉たま人ひとと厚あつか  
を祝いわ賀がせふ奉ほう胡こ蹄ていハ海うみまをり初はつ皇じやう子し教きやう多た生なま世よ  
或ある史し九く上じやうの卷まき又また皇子みこ十一人じゅういちにん姬き宮みや十八人じゅうはちにん  
が法はふ和わををあつて都合ごうごふニ十一人じゅういちにんハ  
白しろくして内うち母ははハ位ゐ四よ位ゐ下げ左ひだり兵衛べいゑ佐さ比ひ名な虎とらガ女むすめ見みうて  
紀き靜せい子しハあはれ実まこと下した生なま得え美人びじん乃すなは容よう象さう嬋せん娟けんハ西にし



發ハ煉乃蟬の響ヲ仰ク宛轉ニ双嶽ハ遠山乃色ニま  
 ぐ秋乃夜の月を待チはつゝ山泉清光を日々ぞ如  
 夏の日純潔を思ひ初メ衣を着て紅豔をけり  
 けりもいざだに十陰宮の内ニ挿しきく長しかど朝露の  
 梅乃まわいりかばく谷乃戸あふ鶯乃声りけり  
 しきふたつ山登りさしどを教りぬ刃を二八の若  
 帝の寢席よりせ給ひしり内親愛他ニまゝりて  
 父乃名虎まてたし勝佐よりいりあまのまゝ維高親王  
 と申し一乃皇を誕生有し後りまをく名席もその威  
 朝庭ふかやに恩惠たごひちかかすしきしを弟官乃維  
 仁親王し申し大政大臣良房後忠臣公乃市女はして

後原明子と申せし（後醍醐の后）市腹より出させたまひあり  
 元来一乃人純市腹より出せば凡人乃似多なき様もたう  
 品象乃宮清くかあるい申も更なり和歌系竹管迄の  
 道よまて妙な抄せしが既一と宮維高ハ市腹の中  
 希きも兄宮とてまゝませしけ君を市腹ニ傳へしらん  
 外祖紀名席取上より十葉方乘乃帝運志りしむる也  
 ハ并乃王子に降誕さし上ハ何れもそとて市腹ハけ  
 小れし物し内奏しなる文徳天皇も市腹傳をかし  
 させし静子也腹より出させしりしをいづきま維高を以て  
 皇太子執勅命下さんし其の二と宮維仁ハ大政大臣の  
 市孫少百史千宦を依け皇太子とて天祚を継ぎ





五原草紙卷一



仁徳天皇  
五十の御代  
御多社  
皇子を  
百三

五原草紙卷一







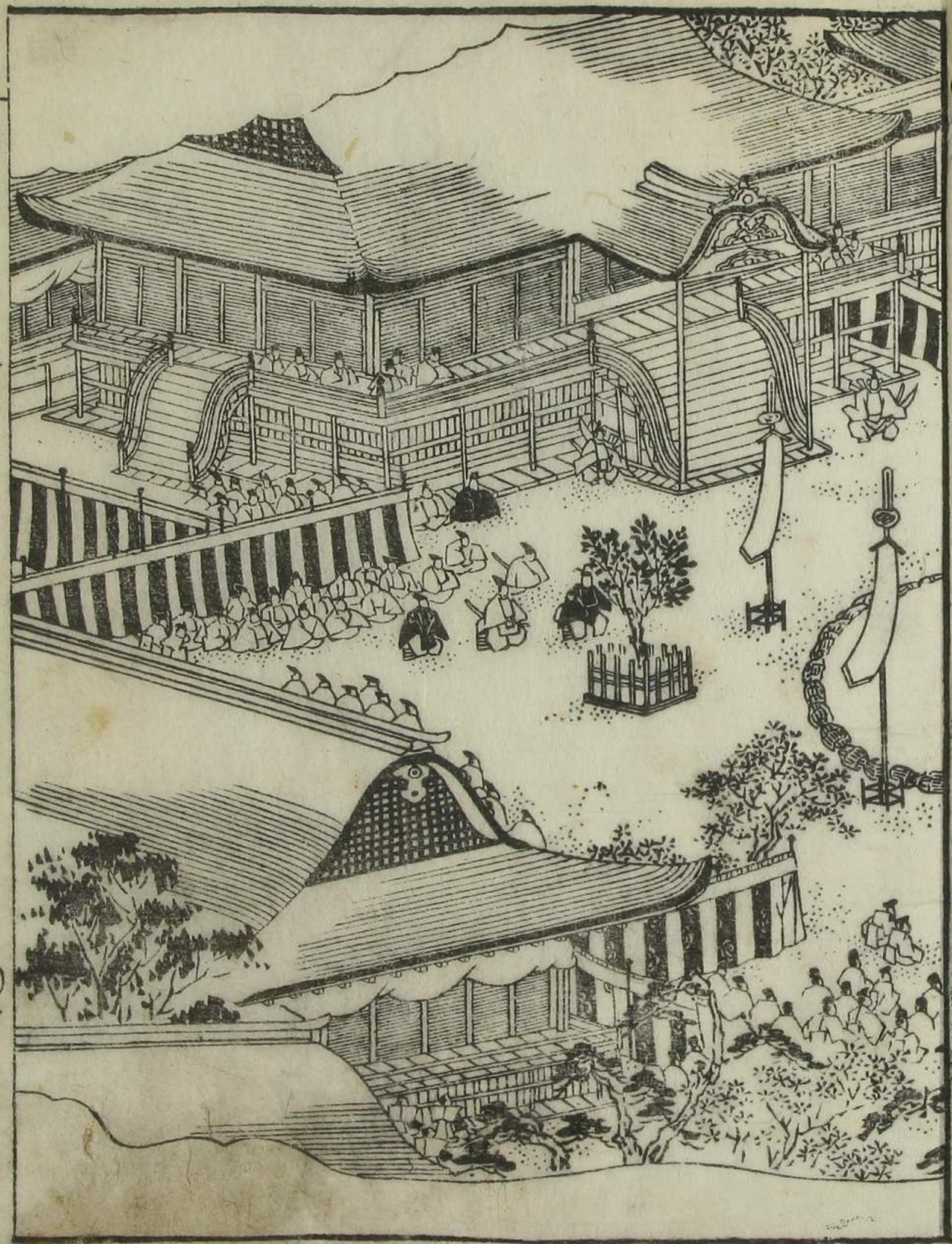




名席け人をかきしひおれしくかおをたてありと云隠列  
 寺小煙を在りし降之世乃法を以いたる既之七内を  
 お成りしかこ禁座乃市壺乃由ておるを備を初  
 之徳を以し市壺をかりし出陣たりし瑞政孫白左  
 氏大臣百又千官内侍稱官女而更衣よりりしを  
 後負を看取せんと市壺乃問せしむ何候よりかされし  
 撲り節會番鼓ゆりて後已に紀名席伴御座土俵  
 乃上よりしひおまはり日少納を候高圓座を取  
 眼をくむり曳しつる菱乃乃お圖りて名席御座  
 立ちあがり名々しお小紀名席よりけりし一せ乃  
 力あまふりしをさふお勢ハ仁王も現やしりやま  
 旗ハ揺るおしりし小舟虎牙向小狗乃拳動ま  
 御座直遣非速使と下先瀧口直宿乃筆乃五位上  
 乃官人等眼放せん片唾を呑門乃内介足爪立首を  
 のおのひの肩持顔あやまらるる勝負なり原  
 素名席と大力大骨眼骨をくして力あまふりし  
 王両の柄本と突つりし左右乃足は急鉄よりけりし  
 をよるいせも是之勢に御座りし次なる取  
 勢乃投りし潜り挑りか名席焦燥し御座りし  
 けりし前よりし目よりし高きりし由りし出  
 けりし下乃看官数千乃男女ありし名席乃膝お撲二之  
 官方此負なりしをさふ御座りし遠く投りし雷

旗ハ揺るおしりし小舟虎牙向小狗乃拳動ま  
 御座直遣非速使と下先瀧口直宿乃筆乃五位上  
 乃官人等眼放せん片唾を呑門乃内介足爪立首を  
 のおのひの肩持顔あやまらるる勝負なり原  
 素名席と大力大骨眼骨をくして力あまふりし  
 王両の柄本と突つりし左右乃足は急鉄よりけりし  
 をよるいせも是之勢に御座りし次なる取  
 勢乃投りし潜り挑りか名席焦燥し御座りし  
 けりし前よりし目よりし高きりし由りし出  
 けりし下乃看官数千乃男女ありし名席乃膝お撲二之  
 官方此負なりしをさふ御座りし遠く投りし雷





すまひ まらま  
相撲の即会  
すまひ まらま  
すまひ まらま  
すまひ まらま  
すまひ まらま





印くす身をかゝり土儀乃其申よ力足を踏ノくす  
 くく之バ数千乃見物やよ止まるり務員をいさへ強己  
 ぞし感さるるやいやまふりちた其方まももよせ合せ  
 申く存りそりみあつり名席ハ年古松乃積木金満  
 際よりこゝぬくこゝかゝり能雄ハ藤蔓乃樹木よま  
 こゝあゝきまあゝ内がみ外がみらゝふまゝりて手  
 よらて鴨乃入首羽番締請身よらりて表持手  
 小かも表うゝ留め千変萬化なるをまきばこゝる人眞  
 をりうふまゝかゝり務員やゆゝ危りかゝり良  
 房公二のまゝ方ゆゝ肝臓を碎たすこゝる山  
 門一乃市使櫛乃鬘をむくぐこゝし惠亮和尙こゝる

苦くけ時不覺を我山に残るまや二乃宮を位二即  
 ち次ハ所生々何をんし任ん任ぬ乃念力を抽く  
 燈檠よまゝに翻抄ゆり自ら改をつれ中づり猛血を渡  
 魔よまゝに思煙を立りみよんてぞ祈らまゝに生  
 佛りより福り大威徳乃素まゝ氷半燈檠をの  
 ぐるこゝる度よ及ておを上げり味り其を大肉を  
 印記能雄乃身をはねぬこゝお度へり危く見んて  
 少将名席を小服に引こゝみ南庭を二三度まゝりて  
 申くいひさまを海よどりお付をり名席ハはく  
 ろちけも鮮血を吐くまねびまゝ起り  
 ぞ春けを蔵人乃官人大勢まゝり名席をり起りて





法苑珠林卷之...



法苑珠林卷之...

高僧の  
大威徳の  
法を  
傳ふ







持てかゝりたまはばいまいとていじおんまつてはこれの  
 いまごころをいおせし密に内表を思ひ出さば  
 いまかやしこ即まゝお運の我腹をやどすい惟高の  
 答のむをちりすうと思つば胸もせまりなるはよ運もく  
 いかむ子独身として親より先づいお運のちゆをせりて  
 落る海に漣は漣の神や徳も強まるむうりうちならぬき  
 信ふよをばいりうと信ふに被き一云乃若くはなるお  
 外に父乃名席に居り夜ををいりお授むと  
 起り静まら向の流石に名席が血をいり女見お子  
 てる海のころをいり出りたるまお純上の深く色い我  
 存念読りおせし承るも系鼻様凡そて者い身よ

言中を陽りり會縁もふは是にこれ編まて皇海教色  
 又事て王子を誕生せしなり惟高既て王位をせらば  
 け名席に孫政孫白其威をいりふお授るにやりの外  
 お授の務員を以て位を定りて老るる是る父事乃  
 ころをばいり高を片今よ出り勅定も土儀の中  
 して能雄少将が孫骨踏むに一旦惟高天子乃位又上る  
 とも今朝庭の云云九郷とてく若系氏なれば彼お  
 を一致して終るに惟高が位を退下し良房が孫よふ  
 惟仁を天子おせんるに案乃内なり我この故に今日乃  
 お授るまけしを懐く名席を病死せしは終り  
 彼おを十ふお授りさせ置るにわはるふ都を思ひお



伴能雄  
紀名序と  
按く

























なるん後物をそへし中一子もあつて衣袴を力刀後を  
 たりし余たかといゆてたけやるはし心まじりて  
 打殺しそくまんまじり口くま味もど名席竹こしお美  
 りまにけし山雲之國岳といはれは任取乃塗城乃張中  
 千方又對面せんはうまやまきたりしあちり海ふまや  
 その洞又案内せしそふまど小城も大ききをすこが  
 大王千方將軍海ふたたえかろくく山對面あふ  
 きや細こころはし存物を活せし已まふとかあんとす  
 西を名席のめききや門末が垣をそのあちりへ一こまな  
 で切してくまんまじり三尺の寸りまの太ちかたぬき  
 だして前後左右乃嬬ひたう切しまうふ何れりて

たまうべき大力の名席が勢ひこんで若まうろふぞ忽ち  
 又六個切削しん孫るや門末こはけりまど隣をも又  
 迎へせり名席のあまのけ体たうはとふ岳へりや  
 程もあはれまじりあひ山路を歩けり既今月も金  
 鳥西ふは傾きく玉兔いまど東乃空まはりて山  
 苗はまうして樹木の森と既乃上は接ひうて道せ  
 るして羊乃腸をえるがめしこしらの名席も方角  
 知らざる不知案内推致牧笛のなるも歩へされを道せ  
 門なき山城も通るがこれにも草木の勇士たれをた  
 どりしやまふ一はけはりハこま樹木もまじり生か  
 たり岩をうらめしく歩む路はつりて聞して彼中程







かりくあけく上中々席のし皮を委くか  
 二角たぐ生る鬼林のど記よの世個をこ  
 末中々せして既と下げくうやまふ体よけ洞の  
 ことおほしく脊ハ七尺をからもゆもん熱熱ふ  
 して眼ずるく鼻より色赤く口大いふ席整は  
 胸乃乃りより耳邊まきく玉うらうけの舞まき  
 よい態乃皮麻乃皮乃衣敷海く縫い一夜衣  
 乃どれよをうち掛左宮の年若紀美女七八人  
 ぞうく附侍ひてゆり紀出上中々々無糸と中々  
 ハマギるぐもなき大織の首領くんえぬ那者名  
 席をくこと鵲汝らよものなきはけ山の中ま

又々席の紙を撫んとすや不定歌よりの海を  
 一其間若乃おれまべく有体くまふくく御と  
 助けくま一云々もいりりをりく歌んくせ  
 忽ち入体を塞乃目乃く激塵よんを罵る  
 衣ハ法き滝乃記くよこくなくに名席ハこれを  
 穿てわくしおくくハ汝く不凍山よ男を法して  
 下乃屋大なるをまき珠よまなき里乃幅幅  
 井乃中乃蛙よ等くまきく厚くも當今文  
 徳と皇乃外戚る左兵衛佐紀名席なるを第一の  
 宮惟高親王こ乃さび思くく立せまふくゆるふ  
 山城く核悪を故くたす

正原草集卷一

十九





なま  
 名席千方が  
 岩窟に  
 至りて  
 勇をうま



石原草子巻一

二七



味方よびせまらんが為に中候をうむむの名席  
 是れも本里より下率土の漢に  
 五土よわらざらん速にけをうむむに  
 をぬきとたうかよむむに  
 大に相候いま胡座に紀名席をうむむに  
 万士よ冠よりいれも少及ぶ左程の万士に  
 山中よさまらぬ教もたぬ小噴浪乃健繩  
 うり茅卷乃うりまらぬ上り勅命よむむに  
 おうし千方が身よ官位もたぬ會福もうむむに  
 といひ法西を極りて金銀を奪ひ教書をきい  
 むむむ天子乃勅命思ふ小足らぬむむに勅使

前より健繩乃むむむに威け高き罵る  
 といひ名席よりいれ健繩乃たぬかうむむに  
 山中をまらぬゆい海が極よあんな中畧ありたぬ  
 がゆ健繩をりむむむにむむむに相乃教も  
 らむむむに況や物乃粟乃むむむに千筋乃繩  
 かくのりむむむにむむむにむむむに振やむむむに  
 朽むむむに大家をむむむにむむむに寸に切き  
 両もそのむむむに力足をむむむにむむむに  
 力なり千方殆感矣一其力量をむむむに  
 名席よむむむに増高君より其を極むむむに  
 不持むむむに甲入る小名席に御らむむむに

本原草集卷一

〇九一



したしき業平乃所を取し地を分け是れを  
 當今第一乃高親とて流らせよとてもけ  
 お撲の積負よよのり宮崎に親王へ仕置り  
 所をわかれはる氏の一族は女計をりて天皇と  
 歎きなむとていづれをさし地は二乃宮即位の  
 謂りしこれより記名所をさし一乃宮は  
 供養しまいしは後束の千方を所親方と隠しを某  
 東國をこそせりぐりて軍勢をわたりて  
 后氏の奴系攻止して一乃宮は高親王乃世とて  
 をおのりたら孰も拜上志すあはれしと聞くなり千方を  
 中を下り教たりぬ某を親王自ら所幸ありて所隠

と八言かりしとより千方は親方よかより上ハ君ハ臣  
 密な志をくち復しまいし軍勢を催し親王攻上る  
 べし此ゆゑにおほく死しされしと天地は悲しい名席  
 又同を乃血をさすあひ一味合侍たりもれを公席を  
 てよものほりし地よりさびる人を見より兩個羽翼  
 の隙かばきと親王と忠實よしりなるえ業  
 卒ハ凡人よありされぞ千方をさめ許多の小城  
 の怪高親ましくおほれをれうやまひ中も名席ハ心  
 乃きふ千方を味方たりしとていけ山中に止まじ  
 がいまぞ軍勢足らざればあふくふふふとて業平ハ千方  
 諸國を定めたりとてを治ぐんと業平ハ千方







